2014年3月13日（木）、日本学術会議講堂
日本学術会議主催学術フォーラム
世界のオープンアクセス政策と日本
― 研究と学術コミュニケーションへの影響 ―

「リーディングジャーナルの育成」と「OAジャーナル化」は両立するか？

学会からみる国際学術誌発信の実情と、今こそ必要な学術政策への提案

公益社団法人 日本化学会
会長　玉 尾 皓 平
（理化学研究所・研究顧問）

日本学術会議　提言

学術誌問題の解決に向けて
― 「包括的学術誌コンソーシアム」の創設 ―

日本学術会議　科学者委員会　学術誌問題検討分科会 （委員長　浅島 誠）
2010年8月2日

抜粋

□ 学術誌による発信に関する課題の解決

◆　国際的に通用するオンライプラットフォームを構築し、リーディングジャーナルを育成する。

議論の大前提

また、その成果およびノウハウを国内学協会に提供し、我が国の学協会全体の発信力強化と持続性のある出版事業につなげる。

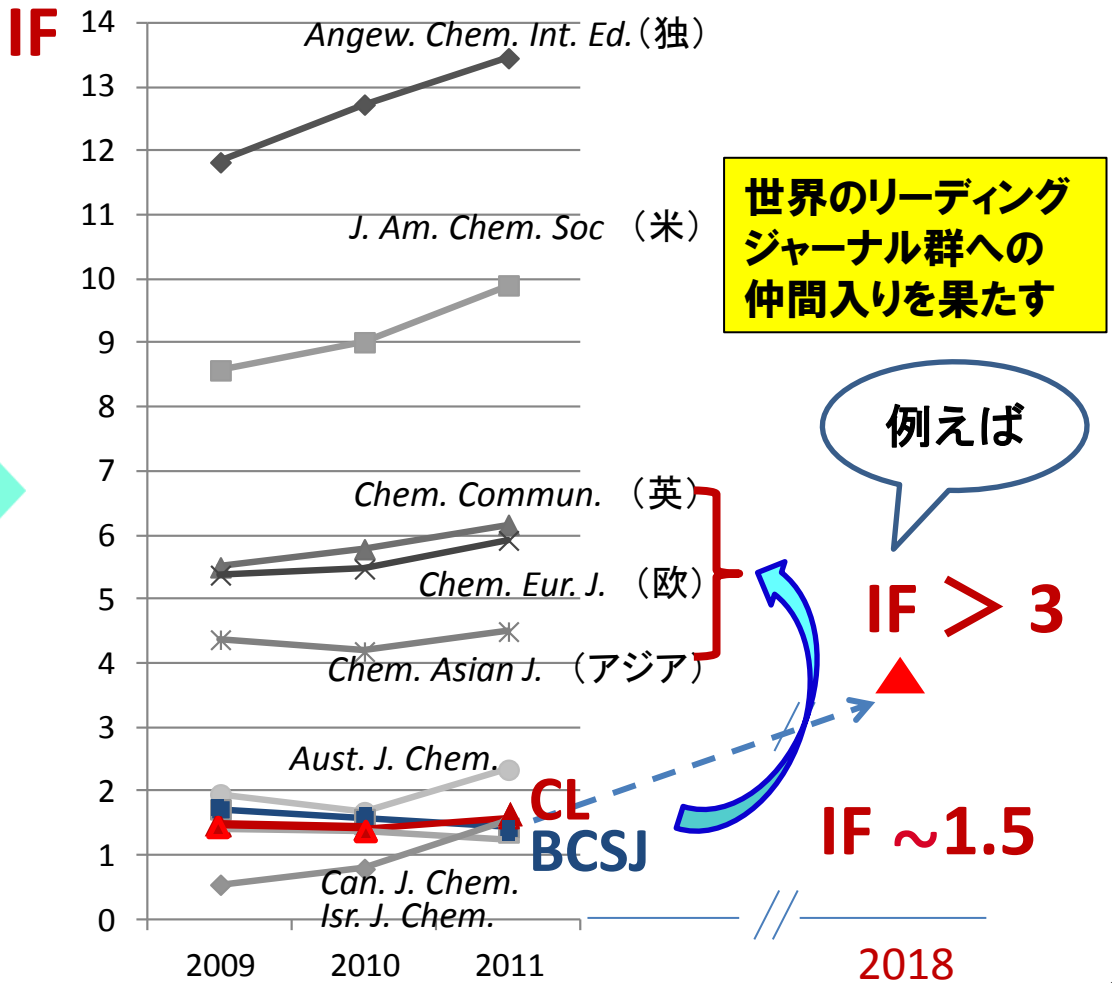
平成25年度～ 科学研究費補助金（研究成果公開促進費）
－国際情報発信強化（A）－

「日本化学会発行論文誌の国際競争力強化」

BCSJ

CL

5年後
の目標



OA化の手段

今日の議論の主題

- **Golden Route OA ジャーナ**
  - ジャーナル自身のOA化（Full Open Access）
    - **掲載料モデル（著者支払いモデル）** $500 - $5000
    - **機関費運営モデル**、寄付モデル
  - 新刊ジャーナルに多い（PLoS, Bio Med Central, Hindawi, Springer Open）

一次情報としての論文のOA化

- **Green Route OA ジャーナル**
  - 原則著者の最終版原稿を利用（Alternative Access）
    - セルフアーカイブ（Self Archiving）
    - 大学機関レポジトリ登録（IR）
    - 政府系レポジトリ登録（Pub Med Central）
  - 購読費モデルジャーナルへのアクセスの別ルートを提供

二次情報としての論文のOA化

- 部分的 OA 化
  - 購読費ジャーナルにOAオプションを付加し、論文毎にOA化
  - 既存のジャーナルの多くが提供
- 期間（エンバーゴ）の有無が組み合わされることがある
  - Delayed OA

出典：**林　和弘、科学技術動向, 2014年1・2月号　142, p. 25-31.**
“新しい局面を迎えたオープンアクセスと日本のオープンアクセス義務化に向けて”
http://hdl.handle.net/11035/2475

今日の議論の主題

- **Golden Route OA ジャーナル**
  ー ジャーナル自身のOA化（Full Open Access）
  - 掲載料モデル（著者支払いモデル） $500 - $5000
  - 機関費運営モデル、寄付モデル

一次情報としての論文のOA化

より具体的な問題設定

「リーディングジャーナルの育成」と
「掲載料モデル（著者支払いモデル）によるOAジャーナル化」は両立するか？

世界的な競争力の不十分な我が国の既存ジャーナルが
「掲載料モデル（著者支払いモデル）によるOAジャーナル化」を目指して、
「投稿料」を著者から徴収することになれば、これまで以上に投稿数の減少し、
ジャーナルとして成立しなくなるだろう。

「機関費モデル」や「寄付モデル」であれば成立する。

「著者支払い費」も「機関費」も、元をただせば国費である。
ならば、国費で「わが国のOA・リーディングジャーナル」を育成するのが
効果的であろう。 ➡ いま先ずやるべきは「リーディングジャーナル化」の達成！

「国費サポートによる」
「高いレベルを維持したOA・リーシングジャーナル」を可能とする
5要因

① 科研費等からの継続的な出版費サポートを前提に、

② 投稿料はできるだけ安く、理想的には投稿料無料で、

国費による OA化

③ 海外の大手出版社に委託せず、

自律した高レベル編集体制

④ 独自に質の高い論文を選別する高質の編集体制を確立し、

⑤ OA対応電子ジャーナル化機能を確立する。

JStage 機能強化なども

このうち、①が実現すれば、②の条件を満たした「国費による、OA・リーディングジャーナル」が可能となる。

- **必要な国費の概算**
  わが国で育成すべきO「A・リーディングジャーナル」を最大で20とする。
  1件あたり、1．5億円／年、予算は最大で約30億円／年・20ジャーナル、となる。
- 科研費でサポートするとして、科研費全体（約2400億円）の1．2%ほどである。
- 科研費の「国際情報発信力強化予算」増によって措置するのが最も現実的かつ実効的があろう。
- 継続的サポートが必須である。

まとめ 「今こそ必要な学術政策への提案」

1. わが国の一次情報としての研究論文を出版する学協会の
「リーディングジャーナル育成」と両立しえるOA化は、
（1）まず「高質のリーディングジャーナル化」を達成し、その上で、
（2）OAジャーナル化を国費（平均1.5 億円/ジャーナル）で
継続的に支援する体制を整えるのが現実的である。

しかし、――――――――――――――――――――――――――――

2. わが国の精選された（20以下の）「OA・リーディングジャーナル」でカバーし得る
我が国からのOA論文数は限られる。
おそらく数千件くらいであろう。総論文数約 7．5万件の10％程度である。
これだけが、「Golden Route OAジャーナル」としてOA義務化に対応可能。

3. 残りの90％は、セルフアーカイビング（機関リポジトリ）等で対応。
いわゆる「Green Route OAジャーナル」としてOA義務化に対応。

4. すなわち、「Gold 10％ ＋ Green 90％」が現実的解であろう。

5. 将来的には、国際相場の投稿料徴収でも成立する実力をつけ、国費負担を
軽減し、自立を目指す。

6. 「寄付モデル」が実現するのが望ましいが、、、
「寄付して支援したくなるようなリーディングジャーナルに育てることが先決」

参考資料（メモ）

（1）化学系論文誌　各国の事情

米国　ACS　独力
英国　RSC　独力
独　　Wiley-VCH（国内出版社）と連携
中国　CCS。CASがRSCと提携して独自にジャーナルを創刊
日本　CSJ　科研費のサポートでリーディングジャーナル化への取り組み
　　海外出版社と提携しない。国の予算は国の活性化に活用する。
　　出版事業を国がサポート、電子化対応　JStage も国がサポート。

（2）今回の「OA・リーディングジャーナル化」の取り組みは「過渡期」の10年程度だけ有効：

・「過渡期」＝海外のトップジャーナル、商業ジャーナルがOA化するまでの間
・「購読費収入」で運営しているトップジャーナルは、購読費ゼロのOA化にすぐには移行しないだろう、10年はもつと予測。
・これらが全てOA化した暁には、図書館費用問題から解放される。
・学協会の「OA・リーディングジャーナル」はIFだけでなく、altmetrics *による評価にもさらされ、新たな試練が待っているかもしれない。
*ref. 林　和弘、科学技術動向, 2013, 3-4号、p20。

（3）メガOAジャーナルが林立する可能性高い。これらに勝つには、サイエンスとして高いレベルを達成・維持し、信頼されるジャーナルとなることが求められよう。